

実況中継「土曜講座」

第9号 2024年10月5日

市川学園 9月28日の土曜講座 於 多目的ホール

小林 慶一郎 先生

「フューチャー・デザイン

—未来の視点で社会をデザインしよう—」

慶應義塾大学経済学部教授



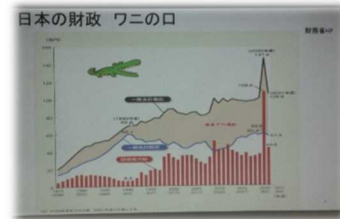
小林 慶一郎 先生のご紹介

東京大学大学院終了後、通商産業省（現・経済産業省）に入省、2013年に慶應義塾大学経済学部教授に就任されました。キャノングローバル戦略研究所研究主幹、財政制度等審議会委員等の政府諮問機関の委員など、多方面にわたりご活躍でいらっしゃいます。

主な講義内容の紹介

第5回土曜講座は、経済学者の小林慶一郎先生より、「フューチャー・デザイン—未来の視点で社会をデザインしよう—」という題でご講演をいただきました。現代の諸問題である、地球温暖化・人口減少・財政悪化等を次世代に少しでも持ち越さないために、具体的に何をすべきかについて考えさせられる講義でした。将来世代の人になりきり、シミュレーションを試みるワークショップの紹介では、実際に自治体の政策に生かされた例をご教示いただきました。今が良ければすべてよし、ではなく未来の世代の人たちから「ありがとう」と感謝されることに現在の我々が価値を感じられるようでありたいですね。

もし、小林先生に将来からの視点で「2024年にどうしてほしかったか」と振り返る問いをたてるなら、「独立財政機関」を一日でも早く作り、財政立て直しのきっかけを作らねば、とお答えをいただくのではないのでしょうか。私たちの死後にどのような世界になっているか、思いをはせることは意外とワクワクすることかもしれません。皆さんも身近なことの20年後、30年後を考えると自分の未来を変えるかもしれませんね。



受講レポートから

- ・ 今、未来の世代について言われても実感がわかかなかったけれど、具体的なグラフを見て推定人口や財政について目の当たりにすると、驚くばかりである。（中1女子）
- ・ 目先の利益を差し置いてでも将来世代のしあわせを目指すことで、今の自分にしあわせを感じる事が将来可能性につながる、という考え方がすごいと思った。フューチャー・デザインは、将来の可能性を發揮できる社会を作れそうだった。（中1女子）
- ・ 未来の世代のための活動は現実的に見れば現在の世代へのコストに対するリターンが少なすぎると強く感じたが、未来の世代に現在の世代の価値が支えられているというお話から、未来の世代のために行動を起こすことで、現在の世代への利益を感じることができた。（中1女子）
- ・ 私たちが人生の価値を感じられるのは、将来世代のおかげだ、と聞いて考えたこともなかったのでもびっくりした。現代では目の前の問題解決が優先されるため、フューチャー・デザインの考え方は、将来世代にも利益があるように政治を変えられる取り組みであることを知った。（中2女子）
- ・ 人口減少、少子高齢化、財政逼迫など、あらためて聞くと日本の将来が不安になった。フューチャー・デザインの考え方は政治経済の分野だけではなく、部活動やクラス運営の際にも応用できそう。道徳やLHRなどの時間にクラス全員で取り組んでみたい。（中2女子）
- ・ 今の世代の人たちが未来の世代になりきって議論するというスタイルは全く思いつかなかったのでおどろいた。そのように想像を膨らませることでおのずと今本当にすべきことがわかると思った。（中3女子）
- ・ 「今の自分の年齢のまま未来にタイムスリップしたと仮想して現代人に送りたいメッセージを考える」ということについて、一見とても難しく感じたが、先生のお話を聞いて、後世の人たちがいるからこそ私たち現代人は生きる価値を見出している、私たちは後世の人たちに依存していることにとでも納得した。人間は他者からの「承認」によって自分や自分のしている物事に対して価値を感じることができる。そしてその「承認」は連鎖としてつながっており、たどると将来世代という未来につながっている、ということがとても面白かったし「承認」について興味がわいた。（中3女子）
- ・ 正直、普段の生活では次の自分の行動のことを考えることで手いっぱい他のことを考えることは難しい。しかし、フューチャー・デザインを体験することで、第三の視点で物事を見ることは大切だと思い、自分本位な意見だけが出てくるのが無くなるのではないかと思った。（中3女子）
- ・ 今の年齢のまま未来へ行ったらどうなるか、という視点が興味深くおもしろかった。私たちは未来の人へ恥のないようによく考え、環境のために動けるような生活を送りたい。（高1女子）
- ・ 実際にフューチャー・デザインワークショップを行った自治体の例では、自分が将来やりたいと思っている都市計画において具体的な対策例を学ぶことができた。（高1女子）
- ・ 日本がここまで切羽詰まっていることをしらず、不安になったが、試行錯誤をしながらフューチャー・デザインを通じた解決策が見えてくるようで楽しく興味深かった。初めて聴く内容ばかりでまだまだ社会に浸透しきっていない状況が悔しかった。（高2女子）
- ・ フューチャー・デザインが自治体単位で機能していることに驚いた。ただ、国家単位の大きな話になったときに、将来可能性だけで（特に世代間問題に関して上の世代の恩恵を受けている私たちの世代は特に）実際にコストを負担する決断ができるのか疑問に思った。（高2男子）



（文責：武井 大輔 先生）